広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Der Nîbelunge Nôtの比喩表現 <特集 比喩表現>
Author(s)	岡崎, 忠弘
Citation	広大言語 , 8 : 3 - 8
Issue Date	1968-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046286
Right	
Relation	

§4　おわりに

上記のダンテの比喩は，錬りに錬って作られた格調高いものであろうが，やゝ廻りくどい，じれったい感じもする。これに反して，ホメロスが用いている ho d'ēie nykti eoikōs。⑤「彼（アポロン）は，夜の如く立去った」（イーリアス，I，47）という比喩は，短かいけれども，それだけ一層強く印象に残るものである。

(注)

①イタリア語で比喩表現を行う時には，come (Fr. comme＜lat. quomodo)「～のように」と云う小詞を使えばよい。また，come の代りに，a guisa di～「～のように」を用いてもよい。

②この come のうしろの il は男性定冠詞，un は男性不定冠詞，una は女性不定冠詞であるが，これらの用法に関しては，拙稿「イタリア語における冠詞研究(1) ── 比喩表現を中心として ──」広島大学文学部紀要，第25巻2号所収を参照されたい。

③lo'mperché (＝lo imperché)「理由」と云う語は，羊に対して用いられているが，魂に対しては il perché「理由」と云う語が用いられている (Purg.III,93). ダンテは，羊に対する言葉と魂に対する言葉とを使い分ける程の細かい心遣いをしている。

④allotta は，allora「その時」の意を示す副詞であって，Vid'io「私は見た」を修飾するものと思われる。

⑤ho は指示代名詞；d' は particle；ēie は eimi「行く」の imp.3,sg.；nykti は nyks「夜」の dat. sg.；eoikōs は eoika「～に似た」完了受動分詞の nom.sg.m.

Der N↑belunge Nôt の比喩表現

岡　崎　忠　弘

§1　はじめに

この小論の目的は Der N↑belunge Nôt の比喩表現の状況を把み，それについて若干の考察を加えることにある。

なお，テキストは Der N↑belunge Nôt (Im Insel-Verlag zu Leipz-

ig，1955）を用いた。

そもそも比喩表現とは，ある物の性質あるいは状態を，類似している他の物を借りてそのものの持つ性質・状態をより明確に，より力強く表現する一種の強調の修辞法であると考える。「雪のように白い」（直喩法）と「頭に霜を戴く」（隠喩法）に分けられる。なお，珍奇ではあるが，「教授らしい教授」とか「学生らしい学生」の表現も，共通言語圏に「教授」・「学生」の最大公約数的像があるからこの表現は成り立つのであって，やはり一種の直喩法である。

§2 Der Nîbelunge Nôt の比喩表現の状況

（直喩）

1. Adj，(od.verb) + alsô(alsam，sam) + Substantiv

（文末の数字は Strophe の番号）

o Die arâbischen sîden wîz alsô der snê unt von Zazamanc der guoten grüen alsam der klê, 362

（雪のように白いアラビア絹とクローヴァの如き緑色をした上等のツァツァマンク絹）

o marmelsteine grüene alsam ein gras, 404

（草の如き緑色の大理石）

o pfelle drobe lâgen swarz alsam ein kol: 365

（炭の如き真黒な毛織のきれが配せられた）

o alsam die lewen wilde si liefen an den perc, 97

（彼等は山のほとりまで荒れ獅子の如く駈けていった）

o Sam zwei wildiu pantel si liefen durch den klê: 976

（彼等は二頭の野生の豹のようにクローヴァの中を駈けていった）

o dâ vihtet einer inne, der heizet volkêr, alsam ein eber wilde, 2001

（その中でフォルケールと申す者がまるで野猪のように戦っている。）

o Alsam tier diu wilden wurden gekapfet an die übermüeten helde von den Hiunen man. 1762

（この傲岸な勇士たちは，フン族の人々から，さながら猛獣のように驚嘆の眼でながめられた）

o Sam vliegende vogele sô sach man si varn, 1343

（彼等はまるで飛ぶ鳥の如く駈けてくるのが見えた）

o Si swebten sam die vogele vor im ûf der fluot. 1536

（彼女らはさながら水鳥の如く彼の前の流れの上に浮んでいた）

o si klagent sam diu wîp. 2015

（彼らは女のように歎くのだ）

o daz sîn stimme erlûte alsam ein wisentes horn. 1987

（彼の声はさながら野牛の角笛のようにひびき渡り）

<die sint noch wîzer dan der snê. 508 あれらは雪より白い>

以上１１例である。「白さ」を雪に，「緑」を草に，「黒さ」を炭に，「速さ」を動物にたとえている点，まったく素朴そのものであると言えよう。

この他に，alsô，alsam，sam の接続詞を用いず，nhd. の morgenschön と同じ造語法（Substantiv ＋ Adj.）を用いている例も５例見られる。

o Ir schoenez antlütze daz wart rôsenrôt. 241

（彼女の美わしい顔容はバラ色に染った）

o von snêblanker varwe ir ros und ouch ir kleit wâren vil gelîche, 399

（彼らの乗馬も衣裳も，みなそろって一様に雪白のものであり）

o In sabenwîzem hemede si an daz bette gie. 632

（彼女は麻のように真白な肌着をつけて臥床にはいった）

o von ir zweier swerten gie der fiurrôter wint. 2275

（彼らの二本の剣からは紅の火花を散らす太刀風が吹き起った）この fiurrôt は 186 にも見られる。

雪，麻，火，バラいずれも古代ゲルマン人の連想の質朴さがうかがわれる。

2. verb ＋ alsam (sam, sam ob, alsô, als, sô) ＋ 節

o er fuort ez balde dannen, alsam ez wæte der wint. 482

（さながら風に吹きおくられるように，すぐさま彼は漕ぎ出した）この比喩表現は 185, 456・460 にも見られる。

o daz velt begonde stouben sam ob al daz lant mit louge

wære erbrunnen: 596 (及び 1841)

(野面はさながら焔が燃えさかったように砂塵を捲き上げた)

o Nu gie diu minneclîche alsô der morgenrôt tuot ûz den trüeben wolken. 281

(さながら曙の光が暗い雲間から射すように今や愛らしい姫は姿をあらわした)

o Sam der liehte mâne vor den sternen stât, der schîn sô lûterlîche ab den wolken gât, dem stuont si nu gelîche vor maneger frouwen guot. 283 (及び 817)

(雲間から皎々たる光をはなつ満月が星々を圧して照りわたるように，彼女もまた数あるみめよき婦人のまえに照りまさっていた)

o sîn herze tugende birt, alsam der süeze meije daz gras mit bluomen tuot. 1639

(彼の胸が徳性を育くむことは，さながら快い五月が草木の花を育てるに似ており)

o daz wazzer wart verdecket von ross und ouch von man alsam ez erde wære swaz man sîn vliezen sach. 1377 (及び1378) (河の流れの見えるかぎり，それはさながら陸地であるかのように，馬と人とに埋めつくされた)

o si dienden im nach tôde als man lieben vriunden sol. 1062 (及び256) (彼らは彼の死んだのちも彼に対してさながら親愛な友に対するごとく奉仕するのであった)

その他，sam si ze lebne hêten niht mêr deheinen tac. 41; sam er entworfen wære an ein permint von guotes meisters listen, 286 ; sam ob si solde strîten umb elliu künegès lant. 434 ; sô noch die wegemüeden tuont. 485

(隠喩)

この文例は全編中15例看取される。その主なものを示せば：

o Die vanen hiez er lâzen in dem sturme nider. 217

(戦闘半ばに，彼は旗をおろすように命じた) 降伏を意味する。

o er hete solhen dienest vil selten ê getân, daz er bî

stegereife gestüende ie helede mêr. 398

（彼はおよそこれまで，他の勇士のため鐙のそばに侍るというような奉仕は曾てしたことがなかった） 郎党として主君に仕えることを意味する。

o Si holten ûz den helmen den heize vliezenden bach. 2288

（彼らは兜の中から熱い流れる小川をひき出した） こゝで bach とは bluot（血）のそれである。

o hie schenket Hagene daz aller wirsiste tranc. 1981

（こゝでハゲネの酌いでくれる酒は世にまたとない悪い酒だ） こゝで trank は bluot を意味する。

o des muosen liehte ringe werden missevar. 2218（及び2270）

（そのため輝く鎖鎧は色が曇らずにはいなかった） missevar werden とは bluot にぬれること。

o diu ir vil liehten ougen vor leide weinten dâ bluot. 1069 （彼女の明るい眼は悲痛のために血を涙した） bluot weinen とははらわたの裂けるような哀泣を表現している。

o im valsche neig im tiefe der ungetriuwe man. 887

（こ不実の男は偽って低く頭を下げてみせた） im tiefe neigen はこゝでは深い感謝の表情を示す。

o sîn videlboge im snîdet durch den herten stâl: 2006

（彼のヴァイオリンの弓は堅い鋼鉄をもたち切り） videlboge とは swert（剣）のこと。彼，即ち volker は武人にして楽士であるため，彼の戦闘の様はヴァイオリンの演奏にたとえられている。この例は，1785，2002，2004，2007，2269 にも見られる。

o mit dem lebne kûme ich dem tiufel entran. 2311

（私は命からがらあの悪鬼の手を逃れて参りました） der tiufel とは残虐な勇士 Hagene のことを指している。

§3 まとめ

「18世紀の歴史家ヨハネス・フォン・ミュラーが『ニーベルンゲンの歌』をドイツのイリアスと呼んで以来，この二つの叙事詩は多数の学者によって比較論評せられた。（中略）なるほど

『イリアス』に於て溢るるばかり豊かに示されている造形的姿態，また自然を表現する驚嘆すべき言語芸術に比すれば，ドイツの英雄叙事詩はあまりに不手際であり，文体は単調にして精彩を欠くうらみはあろう」（「ドイツ中世叙事詩研究」，相良守峯著，郁文堂出版）――まさに，この英雄叙事詩は，もし登場人物の性格の内面より湧き出る強力な意欲の発動による悲劇性への高まりが全編を貫いていなければ，変化に富まない文体や変わりばえのしない表現形式のため，読者を退屈させてしまうだろう。この叙事詩に見られる５０の比喩表現もその殆んどが，豊富な表現手段を知る現代人にとっては，新鮮味に富まないきらいはある。その辞句は決して絢爛美麗なものではなく，語彙は貧弱である。従って，感情のこまやかなひだやしっとりと心を把むような情景描写は見られない。森は常に grün であり，朝は常に kühl であり，泣き声は殆んど城や館や街がどよめくばかりに激しいと表現される。

しかし同時に，この英雄叙事詩の叙述は，その比喩表現も含めて，古代ゲルマン人の生活そのもののような素朴で健康で原始的な表現と見做すこともできる。ここには虚飾の表現はなく，虚弱な叙述は見当らない。なるほど表現は荒削りであるが，そこに却って荒削りの有する生々しさと力強さを見る。フン族のもとへ，死の国へ旅立つ勇士らとその妻子との別離をたゞ一句に叙して，beidenthalp der berge weinde wîp und man. 1522（山の両側で女も男も泣いた）。このぶっきら棒な，しかし力強い表現に感動を覚えるほどに，古代ゲルマン人の素朴な感情と健康な魂の中にはいり込んでゆこうとする気構えのない読者にとっては，この英雄叙事詩のもつ脈動は伝わってこないだろう。「火のように赤い」の火は，電灯をもっているわれわれ現代人の「火」とは全然別の「赤い火」なのである。この観点から der Nîbelunge Nôt の比喩は考察しなくては，その比喩の意味深さは把握できないだろう。

ハムレットの比喩について

大　庭　拓　郎

☆　本を読んでいると，その作者独特の比喩的表現が出て来て大変興味深いもので，特に格言などには，動物の持つ特性などを引き合いに出して表現されていることが多いようである。日常生活の会話の中にも，いろいろな動物が登場してくる。先日ＮＨＫの学校放送の Listen to me!（Ｓ．４３．５．２２．放送）の中に次の様な会話があった。

Don : What are we having for dinner, Mom?